福島敏夫随筆集

「乙戸南雑話「花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

主宰論説３５

世界史における東西交易および文化交流の流れ

世界史をながめてみると、西洋と東洋、隣国同士、南北の遠い国同士、海を隔てた遠い国同士などで、物資の交換・交易とともに、文化交流が、盛んに行われていた例も多い。古くは、遊牧のスキタイ民族が、中央アジアの「草原の道（ステップ・ロード）」を通じて、「黒貂」の毛皮の東西交易を担っていたという。この草原の道は、交易だけでなく、匈奴、フン族などの北方遊牧民族の西洋への移動ルートともなった。また、南シナ海およびインド洋、ペルシア湾を結ぶ海上の交易路は、「海の道（シー・ロード）」として、早くから開けていた。古くは、スマトラ島に本拠を持つマレー系の海洋交易王国の、シュリービジャヤ国が、マラッカ海峡における海上交易路で、主要な役割を担っていた。また、その後、イスラム系商人（ムスリム）が、交易を担い、陶磁器を主交易物資とし、こしょう、宝石などの交易が行われていたという。ユーラシア大陸の真ん中のタクラマカン砂漠のオアシス地帯を経由する「オアシスの道」は、今でも、多くの人のロマンを誘い、シルク・ロードとして、名をなしているが、もともとは、この３つの道が、競合しながら、また、相互に影響を受けながら、発達したようである。他方、旧ペルシアから中央アジアを経由し、オアシス地帯を連ねて、東アジアに到る逆ルートは、「火の道（ファイア・ロード）」として、西域と東アジア諸国の交易・文化交流の幹線にもなっていた（西瓜やザクロなどの果物、拝火の儀式などの伝来も思い起こされる）。最近のグローバリズムによる世界的規模での交易および文化交流の流れの中でも、機械動力のない時代の、この東西交易と文化交流の系譜について、思いを巡らし、今後のあり方を考えるのも、悪くはないだろうと思われる。

古代ローマ帝国と古代漢帝国は、ユーラシア大陸の西端と東端にあったが、砂漠のオアシスを縫って、中央アジア、ペルシアを中継地としながら、絹を主体とする交易を行っていた。この交易ルート が、「絹の道（シルク・ロード）」の由来であるようだ。当時か ら、「駱駝」を移動手段に使い、オアシスを休息と物資補充の中継地とし、隊商を組んで、ゆっくり時間をかけて出かけ、難所もあり、盗賊に襲われ、天候不順に悩ませられるなど、決して、平坦で、楽な行路でではなかったようである。大航海時代においても、帆船で、大海原を疾走し、港を経由し、大洋を挟んで、交易したときも、海の暴風雨による難破等の危難もあったようである。それでも、交易のロマンと夢と実益が、人々を駆り立てたものであるようだ。東西貿易における障害をなくすために、運河やトンネルが築造されたように思われる。他方、中世において、マルコ・ポーロが、シルク・ロードを介した「東方見聞録」を表し、東洋の文化を西洋に知らしめる基となった。また、サラセン帝国が成立し、イベリア半島が、イスラム圏であった頃の名残として、アルハンブラ宮殿があり、世界遺産ともなっている。昔訪れたスペインの旧ハプスブルク家の王宮の部屋に、旧イスラムの影響と思われる、「青（ラピスラズリ）」を主体とした装飾を目にしたが、東西文化交流を反映していたものである。また、時代が下がって、日本の安土・桃山時代に、日本の白磁（有田焼）の陶祖となった李参平が、旧李氏朝鮮から日本に到来して、日本の白磁文化が花開いた（昔、北九州市国際会議場で開催された国際景観シンポジウムで、李参平が、旧鍋島藩の要請で、この白磁の源になる陶土を探り当てるまでの過程を動画で見たことがあり、大きな感銘を受けたことがある）。この日本の白磁の技術が、東独のマイセンの白磁技術の基礎となり、南フランスのプロバンスや、イギリスのウェジウッドなど、広く欧州の白磁文化の興隆の源となった。この李氏朝鮮および日本の白磁技術とドイツのマイセンの白磁文化の深い関わりは、陶磁器を通じた地域の経済的興隆の源ともなった、極東と欧州との文化交流の貴重な例である。オスマントルコ帝国が成立し、アフリカ、アジア、ヨーロッパをつなぐ要衝の地を抑えたために、東西交渉が、難しくなり、大航海時代が始まったと言われる。いずれにせよ、東西や南北の交易・文化交流は、対等の立場と相互利益が、基本になっているようである。

自由俳句：

満天下夜空にきらめく星を見て遠くを目指す旅の道かな

令和５年１月１９日
令和7年7月21日修正
令和7年8月7日再修正

冬景色と春の息吹

雪の銀世界の冬景色は、寒気による身の引き締まるとともに、空の青さを特に感じさせるようだ。また、冬の夜空では、月も、春、夏、秋などの他の季節の場合とは別の感慨を抱かせるように思う。冬は、落葉で、幹と枝だけのスリムな姿になり、実を付ける木も少ない。わずかに、千両、万両、南天などの赤い実が、あるくらいである。それでも、春の息吹が、少しずつ感ぜられるようである。冬の花として、山茶花と椿の花が、一般的であるが、冬桜、河津桜の、早い開花の便りも届くようであり、太陽がさんさんと降り注ぐ南国では、菜の花が咲き出している映像が流れている。最近では、「富士山と菜の花畑のコラボレーション」の映像は、心の癒やしに役だっているようである。

自由俳句：菜の花に遠く輝く富士の山

令和５年１月１９日

二刀流と多頭流方式

最近、専門領域だけでなく、副専攻の形で、異分野の知識を併せ持つようにすることの効用が、喧伝されるようになっているようだ。二刀流も、盛んであるようだ。少し意味は違うかもしれないが、多刀流、多頭流方式というのも、多くなりそうである。この道一筋に精進して、奥義を究め、名人芸に達する事は、今でも、人に感動を与え、後に続き、生きる人たちのための道標ともなってきた。ただ、 昨今、不透明で先の見通しが必ずしも明確にならないために、異分野・異業種の協奏、融合、統合などにより、新しい夢と希望のある方向性を見いだすことの必要性が、増しているようである。昔の共和制ローマ時代に、元老院で、三頭政治が続いたが、やがて、５賢帝が現れる帝政に移行したというが、どうなるか、見守りたいところである。多頭流も、今のところ、複数の馬が、並んで、スクラムを組みながら、疾走する姿がイメージされているが、いずれは、融合等による一本化される方向で進むようだ。

俳句：多頭流一本化はいつの日か

令和５年１月２０日